

マルクスの疎外論と『ドイツ・イデオロギー』

岩 淵 慶 一

はじめに

周知のように、初期マルクスの疎外論が後期マルクスによって超克されたというマルクスの解釈上の仮説は、今日もなお若干の信奉者を見出している。そしてまた、これもすでに周知のことであるが、近頃、この仮説の信奉者たちは『ドイツ・イデオロギー』に特別な関心をよせている。⁽¹⁾ なぜなら、彼らの考えによれば、この共著に疎外論超克説の論拠となるものが多数見出されるからである。たしかに、『ドイツ・イデオロギー』の未熟な読者には、この考えも正当性をもっているかのようにみえるかもしれない。だが、はたして実際にその通りであろうか。私見によれば、けっしてその通りではないのである。以下、私は、疎外論超克説が『ドイツ・イデオロギー』においても正当化されえないこと、むしろこの共著においても初期マルクスの疎外論がたんに保存されているだけでなく、さらにいっそう発展させられていることを明らかにしておきたいと思う。

一

まず最初に、『ドイツ・イデオロギー』にいたるまでの初期のマルクスの疎外論の発展を簡単に顧みておこう。⁽²⁾

よく知られているように、マルクスが彼独自の新たな哲学的地平を切り開き、それをはじめて公表したのは、1843年から1844年の始めにかけて書かれた『独仏年誌』所収の二論文、すなわち『ユダヤ人問題によせて』と『ヘーゲル法哲学批判序説』においてであった。⁽³⁾ これらの論文のなかでマルクスは、青年ヘーゲル派のブルーノ・パウアーやルードヴィヒ・フォイエルバッハ等が主に彼らの批判の鋒先を向けた「人間の自己疎外の神聖なる形態」、宗教的神学的自己疎外が、けっして人間の自己疎外の決定的規定的な形態ではないこと、むしろそれは「神聖ならざる諸形態における自己疎外」すなわち政治的および経済的自己疎外、意識とは区別される人間の現実的生活における自己疎外によって規定されていること、したがって宗教的自己疎外が青年ヘーゲル派の哲学者たちによってあばき出された以上、いまや後者の諸形態における自己疎外がそれ自体としてあばき出され、克服されなければならないことを明確に理解していた。彼

は自らの新たな理論的課題をつぎのように設定している。

「それゆえ、真理の彼岸が消えうせた以上、さらに此岸の真理を確立することが、歴史の課題である人間の自己疎外の神聖なる形態があばかれた以上、神聖ならざる諸形態における自己疎外をあばきだすことが、当面、歴史に奉仕する哲学の課題である。こうして天上の批判は地上の批判にかわり、宗教の批判は法の批判に、神学の批判は政治の批判にかわる。」⁽⁴⁾

この新たな理論的課題を実現して行く過程でマルクスがいちはやく、来たるべき革命の担い手としてのプロレタリアートを見出したことは有名である。『ヘーゲル法哲学批判序説』において彼は、宗教批判、とりわけフォイエルバッハの宗教批判の結論であった、「人間が人間にとって最高の存在である」というテーゼを継承し、それを発展させて新たな内容をあたえ、ここから、「人間が貶められ、隷属させられ、見捨てられ、蔑視された存在になっているようなあらゆる諸関係をくつがえせ」という「定言命令」を提起する。ではこの命令を執行するのは誰か。それは、当然真の人間解放の欲求と能力とをもっていなければならないであろう。そのような主体としてマルクスが見出したのが、「人間の完全な喪失であり、それゆえに、ただ人間の完全な再獲得によってのみ自己自身を獲得することができる一領域」すなわち「プロレタリアート」である。マルクスによれば、このプロレタリアートが、「人間が人間にとって最高の存在である」という理論的観点からおこなう解放のみが、ブルジョア革命前夜にあった当時のドイツの唯一の可能な人間解放であった。

こうして『独仏年誌』の二論文において、その後いっそう豊かに発展させられて行くマルクス独自の疎外論の礎石が置かれたのであるが、しかし、当時のマルクスはまだ人間の現実生活の諸領域における自己疎外の構造を明確にとらえてはいなかった。このことは、先に引用したマルクス自身の課題設定のうちに「経済の批判」がまだ言葉として挙げられていないことからもうかがい知ることができるであろう。もちろん、すでにマルクスは二つの論文のなかでも実質的には人間の経済的自己疎外の

批判を開始していた。だが、明らかにそれはまだ萌芽の段階にあった。そして、この弱点をマルクスは、モーゼス・ヘスやフリードリヒ・エンゲルスから知的刺激を受けつつ、当時の経済学的主要文献をきわめて精力的に研究し、急速に克服して行く。よく知られているように、この経済学研究の最初の成果が、1844年の春から夏にかけて書かれた『経済学・哲学草稿』や経済学研究ノート（『経済学ノート』）であった。この草稿においてマルクスは、人間の内面の意識の領域で生ずる宗教的自己疎外とは区別される現実的生活の諸領域における自己疎外において経済的自己疎外こそがもっとも規定的かつ決定的な形態であるという観点に立ち、それを「疎外された労働」を中心として詳細に分析している。疎外された労働とは、労働者と彼の労働の活動そのものが、したがってまたその活動の産物とが疎遠な関係にあり、主客転倒している状態であるが、労働は人間のもっとも基本的な活動であるがゆえに、この主客転倒は、結局のところ、人間から彼の人間の本質を疎外し、人間から他の人間たちを疎外せざるをえない。マルクスの考えによれば、このような疎外された労働のうちに人間の全隷属状態の根底があるのであって、その他のすべての人間の隷属関係はただこの関係の変形であり帰結であるにすぎない。ところで、この疎外された労働は一見私有財産の結果であるようにみられるが、しかし立ち入って分析してみれば、逆に私有財産の原因であることがわかる。この関係はのちになって相互作用に転じたのである。このようなマルクスの結論は、当然、従来の革命思想そのものにも大きな変化をもたらさずにはおかない。そこで彼は、それまでの共産主義思想を批判的に吟味しながら、彼独自の共産主義および社会主義の構想をつぎのように提起している。この構想が、私有財産の廃絶もふくんでいるが、さらにそれ以上のはるかに豊かな内容をもふくんでいることに注目すべきであろう。

「人間の自己疎外としての私有財産の積極的な止揚としての共産主義。それゆえ、人間による、人間にとっての、人間の本質の現実的獲得としての共産主義。それゆえ、完全な、意識的となった、そしてこれまでの発展の富全体の内部で生成したところの、人間の——一個の社会的な、すなわち人間的な人間としての人間の、自己にとっての帰環としての共産主義。この共産主義は完成された自然主義としてヒューマニズムに等しく、完成されたヒューマニズムとして自然主義に等しい。それは、人間と自然とのあいだの、また人間と人間とのあいだの抗争の真実の解決であり、現存在と本質との、対象化と自己確証との、自由と必然との、個体と類とのあいだの争いの真の解決である。そ

れは、解決された歴史の謎であり、自己をこの解決として知っている。」⁽⁵⁾

こうしてマルクスは『経済学・哲学草稿』で彼の疎外論を飛躍的に発展させたのであるが、しかし、周知のように、この草稿はその後長いあいだ出版されることなく文字通り草稿のままにとどまった。そしてその成果がはじめて公表されたのは、エンゲルスとの最初の共著『聖家族』においてであった。この共著は、『ドイツ・イデオロギー』の少しまえに書かれ、したがってマルクスの思想的発展を考察するうえで重要な位置を占めているので、当面のテーマにかかわる重要な箇所だけでも簡単にみておかなければならない。これまでの疎外論の発展からみてとりわけ興味深いのは、マルクスがエドガー・バウアーを批判しながら自説を展開しているつぎの箇所である。

「批判的批判にしたがえば、すべての害悪は労働者の『思考』だけにある。……だが、たとえばマンチェスターやリヨンの職場ではたらいっている大衆的な共産主義的労働者は、『純粹思考』によって、彼らの工場主や彼ら自身の実践的な屈従を議論でふきとばすことができるとは思っていない。彼らは、存在と思考とのあいだの、意識と生活とのあいだの区別を痛切に感じている。彼らは、財産、資本、貨幣、賃労働などが、けっして観念上の妄想などではなく、彼らの自己疎外の非常に実践的な、非常に対象的な産物であり、したがって、思考、意識においてだけではなく、大衆的な存在、生活において人間が人間になるためには、それらの産物が実践的な、対象的な仕方では止揚されなければならないことを知っている。」⁽⁶⁾

ここでマルクスは、私有財産、資本、貨幣、賃労働などを労働者の自己疎外の産物として特徴づけている。このことは、『ドイツ・イデオロギー』執筆直前に刊行された『聖家族』のなかで、マルクスが、『経済学・哲学草稿』を経ていっそう発展させられた疎外論を保存し、それを基礎にして議論を展開していたことを端的に示している。この点は、引用したパラグラフを一読しただけでも明瞭であるが、念のために指摘しておきたい。さらに、このパラグラフでマルクスが、人間の意識、思考とは区別される存在、生活における自己疎外とその諸産物の実践的な、対象的な性格を強調していることにも注意すべきであろう。先に述べたように、マルクスは『独仏年誌』の論文のなかで「神聖ならざる諸形態における自己疎外」の規定的意義を強調したが、いまや彼は、経済学研究を通じていっそう発展させられたこの思想を青年

ヘーゲル派の観念論に対置しているのである。さらにまた、ここでマルクスが、疎外の止揚の目的を「人間が人間になるため」と規定している点にも注意を喚起しておきたい。この文章において前者の「人間」は記述的説明的概念であるのにたいして、後者の「人間」は価値的規範的概念である。この箇所は、『独仏年誌』の二論文や『経済学・哲学草稿』における同様に、『聖家族』においても、価値的規範的概念がマルクスの革命思想の不可欠の前提をなしていたことをきわめて鮮明に示している。

ところで、人間の現実的生活における自己疎外とその諸産物が実践的な対象的な性格をもっているとすれば、その克服もまた実践的な、対象的な性格をもたなければならないであろう。実際にこのパラグラフでマルクスは、現実的生活において「人間が人間になるため」には人間の自己疎外の諸産物が「実践的な、対象的な仕方止揚」されなければならないことを強調している。では、それは誰によっておこなわれるのであろうか。この問いにたいしてマルクスは、『ヘーゲル法哲学批判序説』以来の思想をいっそう発展させて、つぎのように書いている。

「有産階級とプロレタリアートの階級は、同一の人間の自己疎外をあらわしている。だが、最初の階級はこの自己疎外において快適であり、確証されていると感じ、この疎外を自己の力として知り、またこの疎外のうちに人間的生存の外見をもっている。第二の階級はこの疎外において無化されていると感じ、この疎外のうちに自己の無力と非人間的生存の現実性をみている。この階級は、ヘーゲルの表現を使うならば、永罰のうちに永罰にたいする反逆であり、この階級の人間的本性と、この本性のあからさまな、断固とした、全面的な否認であるその生活状況との矛盾によって必然的に駆り立てられる反逆である。」⁽⁷⁾

このプロレタリアートの反逆の可能性と必然性についてマルクスはつづけて詳細な説明をあたえている。だが、ここでこれ以上引用をつづける必要はもはやないであろう。あらためて指摘するまでもなく、ここで引用したパラグラフは、まえに引用したパラグラフと同様に、『聖家族』においても疎外論がマルクスの議論の中心に据えられていたことを疑問の余地なく示している。そしてまた、このパラグラフも、マルクスの疎外論にとって「人間的本性」、「人間性」などの価値的規範的概念がいかに不可欠の役割を演じていたか、したがってまた、マルクスの思想の実証主義的解釈がいかに間違っているか、をも示している。だが、ここで若きマルクスの思考

の価値的規範的前提に立ち入る必要はないであろう。さしあたってよりいっそう重要なのは、ここでマルクスが実践的な、対象的な自己疎外の止揚の主体についてあたえている説明である。彼の考えによれば、有産階級、すなわちブルジョアジーと地主階級も同じく疎外されているが、しかし彼らはこの疎外において卑俗ではあるがともかくも満足している。それにたいして、同じく疎外されているプロレタリアートはこの疎外において「人間的生存の外見」さえも奪われており、卑俗な満足さえも得られない。したがってプロレタリアートは「人間的生存」の獲得をめざして自らが置かれている状況にたいして反逆することができるし、さらにその状況にたいして反逆せざるをえない。つまりプロレタリアートは、実践的な、対象的な自己疎外を実践的な、対象的な仕方止揚する可能性と必然性〔必要性〕とをもっているのである。たしかにこのテーゼは、マルクス以後の労働者の運動の経験を考慮すれば、さらに厳密に規定される必要があるであろう。⁽⁸⁾ しかし、ともかくもつぎの点については誰一人反論しないであろう。すなわち、このテーゼが『ヘーゲル法哲学批判序説』で提起された思想の延長線上にあるということである。

さて、以上できわめて簡単に『聖家族』にいたるまでのマルクスの疎外論の発展をふりかえってみたのであるが、以上からだけでも彼が『ドイツ・イデオロギー』執筆の少しまえまで疎外論を維持し発展させてきたことは十分に確認することができたものと思われる。そして、このことを確認することができたとすれば、われわれはいよいよ当面の主題にとりくむことができるのである。以上で概観してきた若きマルクスの疎外論は『ドイツ・イデオロギー』でいったいどのように扱われたのであろうか。

二

最初に簡単に述べたように、疎外論超克説を信奉している研究者たちは、初期マルクスの疎外論はまさにこの『ドイツ・イデオロギー』で超克されたと解釈している。たとえば、この説を異常なまでに情熱的に支持してきたわが国の一研究者はつぎのように主張している。

『ドイツ・イデオロギー』で、自己疎外の論理そのものが批判（自己批判）されており、かつて『経哲手稿』でマルクス自らが主張していた命題……が厳しくしりぞけられ、疎外の論理に代って物象化の論理が登場する。⁽⁹⁾

ここで表明されている仮説にたいしていくつかの論拠らしきものが提供されている。しかし、それらのすべて

を吟味してみるまでもなく、以下のわれわれの議論はこの仮説にたいする十分な論駁になるはずである。したがって、さしあたってここでは、それらの論拠らしきものの一つだけをとりあげ、われわれの議論を展開して行く手がかりとしたい。

前節で概観してきた若きマルクスの疎外論の発展は、より立ち入ってみると、ある時点で彼が獲得した理論的成果が彼を新たな諸問題に直面させ、そしてさらにこれらの諸問題の究明が彼に新たな理論的諸成果を獲得させるという仕方でおこなわれてきたことがわかる。それらの諸問題の一つで、理論的にとりわけ重要な意義をもっていたのは、マルクスが『経済学・哲学草稿』で人間の全隷属状態の根底をなしているとみなした「疎外された労働」の歴史的起源の問題である。彼は、その第一草稿のなかで、疎外された労働の詳細な分析をおこない、さらにその人間学的意味を論じたのちに、この労働と私有財産との関係について、私有財産は疎外された労働の産物、その成果にはかならないというきわめて重要な結論を導き出している。この結論はすでに述べたようにマルクスの共産主義思想において重要な役割を演じたが、ここで注目すべきは、この結論によって、共産主義にとって最重要な理論的問題の一つ、すなわち私有財産の起源の問題が労働の疎外の起源の問題に置きかえられるということである。こうしてマルクスは新たに「どのようにして人間は自己の労働を外化し、疎外するようになるのか」という問題に直面したのであるが、しかしこの問題にたいして彼は草稿のなかでは、「この新しい問題提起はすでにその解決をふくんでいる」と書いているだけで、解答をあたえていない。⁽¹⁰⁾

この点について疎外論超克説の信奉者は、たとえば、『経哲草稿』の議論の構造にはある重大な難点がはさまれていた」という観点から、マルクスの新たな問題そのものが類似問題であったかのように解釈してきた。⁽¹¹⁾したがって、この解釈によれば、やがてマルクスは疎外論を放棄するとともにこの問題そのものを放棄したのである。だが、これは真実であろうか。

まず最初に、『経済学・哲学草稿』の直後に書かれたエンゲルスとの共著、『聖家族』をみておこなうならば、この問題に関連していることでは、つぎのような興味深い指摘がなされている。

「無政府性こそは、分枝された特権から解放された市民社会の法則であり、市民社会の無政府性は近代の公的状态の基礎である。」⁽¹²⁾

ここで強調されている「市民社会の無政府性」とは、封建的特権から解放された諸個人の生活諸要素の無拘束

な運動を特徴づけたものであるが、マルクスの考えによれば、このように無拘束に運動している生活諸要素は諸個人から疎外されているのである。このことを念頭に置けば、引用したテーゼの重要な意義はおのずから明らかであるが、しかし『聖家族』のなかではまだこの「市民社会の無政府性」が主題的に展開されているわけではない。したがってまた、この共著では、この無政府性と疎外との関係も、この無政府性の起源も論じられてはいない。

では、『経済学・哲学草稿』で提起され、『聖家族』においても未解決のままで残された疎外の起源の問題は、『ドイツ・イデオロギー』においては、どのように取り扱われたのであろうか。疎外論超克説の信奉者たちは、まさにこの共著で疎外論が放棄され、したがってまた疎外の歴史的起源の問題も放棄されたと解釈してきた。だが、実は、これは『ドイツ・イデオロギー』の驚くべき誤読だったのである。この共著において、疎外の歴史的起源の問題は、放棄されるどころか、まさに文字通り中心テーマの一つとして取り上げられ論じられているのである。このことは、この共著の第一章「フォイエールバッハ」の最後の部分でつぎのように問題を提起していることから一目瞭然である。

「諸個人はつねに自己から出発したし、またつねに自己から出発する。彼らの諸関係は彼らの現実的生活過程の諸関係である。彼らの諸関係が彼らに抗して自立化するということは、彼ら自身の生活の諸力が彼らを圧倒するようになるということ、いったいどこから起るのであろうか。」⁽¹³⁾

『ドイツ・イデオロギー』の著者たちによれば、歴史のどのような階段にあっても「歴史的に創造された対自然ならびに個人相互間の関係」、すなわち諸個人の生産諸力ならびに交通諸形態の一定の総体が見出されるのであるが、これらの生産諸力ならびに交通諸形態こそは他のあらゆるものにまして諸個人の活動の構造を本質的に規定しているのである。だから、「諸個人の諸関係が彼らに抗して自立化し」、「諸個人自身の生活の諸力が彼らを圧倒する」というここでの叙述は、『経済学・哲学草稿』でマルクスが「自己疎外」と呼んだ状態、すなわち労働者の活動そのものが彼らに抗して自立化し、彼らを圧倒するものになるという状態を、新しい概念をもってより立ち入って規定したものにほかならない。したがって、ここで提起されている問題は、『経済学・哲学草稿』では未解決のままに残された疎外の歴史的起源の問題なのである。この自ら提起した問題にたいしていまやマルクスはきっぱりとつぎのように答えている。

「一言でいえば、分業であり、そしてその段階は、そのときどきに発展させられた生産力に依存している。」⁽¹⁴⁾

マルクスの解答は明瞭であろう。要するに、彼はここでまず最初に、すでに『経済学・哲学草稿』で提起したが、しかし当時はまだ答えることができなかった疎外の歴史的起源の問題を新たな概念装置をもって改めて提起し、そしてつぎに、この問題にたいしていま一言で明確に答えているのである。

僅かに一例にすぎないが、この例は、マルクスが『経済学・哲学草稿』で提起した問題を放棄してしまったという疎外論超克説の支持者の解釈が、いかに根拠のないものであるかを、また、『ドイツ・イデオロギー』で疎外論が超克されたという仮説がいかにナンセンスにほかならないかを、十分に示している、といってもよいであろう。この例に示されているのは、なによりもまず、『ドイツ・イデオロギー』においてもマルクスが疎外の歴史的起源の問題を問いつづけ一定の解答を得たということであり、さらに一般的に、疎外論超克説とはまったく反対の仮説が、つまりこの共著においてもマルクスの初期の疎外論が、放棄されるどころか、逆に保存されていっそう発展させられたという仮説が正しいということである。われわれは、この後者の点については、節を改めてやや立ち入った考察をおこなうであろう。さしあたってここでは、以上で挙げた一例を補足するような例をもう一つだけ挙げておくことにしたい。

ここで引用したマルクス自身の問いと答えにおいてきわめて簡単に述べられていた事柄は、『ドイツ・イデオロギー』のその他の諸箇所ですらに詳しく展開されている。それらのうちの典型的なものとしてつぎの箇所が挙げられるであろう。この共著の第一章のなかで、「分業」の生成とともに私有財産が、さらに諸個人の特殊利害と共同利害との矛盾が生じてくるということ、そしてそこから共同利害が国家という「幻想上の『普遍』利害」が自立的な姿をとるにいたることなどが論じられたのちに、つづけてつぎのように書かれている。

「そして最後に、分業はわれわれにたいして直ちにつぎのことについての最初の事例を提供する。すなわち人間たちが自然発生的な社会にあるかぎり、それゆえ特殊利害と共同利害との分裂が現存するかぎり、それゆえ活動が自由意志的ではなく、自然発生的に分割されているかぎり、人間自身の行為が彼にとって一つの疎遠な、対抗的な力になり、人間がそれを支配するのではなく、かえってこの力の方が人間を押さえつ

けるということである。同じく、つまり労働が分割されはじめると、各人は、彼に押しつけられる特定の排他的な活動範囲をもつようになり、そこから脱け出せなくなる。……社会的な活動のこのような自己膠着、われわれ自身の生産物がわれわれを支配する物的な強制力——それは、われわれのコントロールをはみだし、われわれの予期をくいちがわせ、われわれの計算を無効にさせる——へのこのような凝固化は、従来の歴史的発展における主要契機の一つである。社会的な力、すなわち幾倍にもされた生産力——これはさまざまな個人の分業において制約された協力によって生成する——は、その協働そのものが、自由意志的ではなく、自然発生的であるために、これら諸個人には彼ら自身の統合された力としては現われず、一つの疎遠な、彼らの外部に存立する強力として現われる。この強力について彼らはその来し方行く末を知らず、それゆえ彼らはもはやそれを支配することができないどころか、逆にいまやこの強力の方が固有な、人間たちの意欲や動向をまずは支配管理する、一連の諸局面と発展諸段階を巡るのである。」⁽¹⁵⁾

このパラグラフにはいろいろな問題がふくまれている⁽¹⁶⁾が、当面、重要な問題は、これを一読するだけでも知られるように、ここで叙述されていることと、先の問いと答えであらわされていたことが内容上同一の事柄であるということである。ここで描き出されている人間の否定的な状態、すなわち「人間自身の行為が彼にとって一つの疎遠な、対抗的な力になり、人間がそれを支配するのではなく、かえってこの力の方が人間を押さえつける」という状態、「各人が彼に押しつけられる特定の排他的な活動範囲をもつようになり、それから脱け出せなくなる」という状態、要するに社会的活動の自己膠着の状態、さらに、「われわれ自身の生産物のわれわれを支配する物的な強力……への凝固化」という状態、このような主客転倒の状態が、『ドイツ・イデオロギー』執筆以前の若きマルクスが「疎外」という言葉でいいあらわしてきた状態と同一のものであることは、説明を要しないであろう。つまり、このパラグラフは、「分業」によっていかに疎外が生じてくるか、そしてその結果がどのようなものであるか、を述べているのである。このパラグラフに述べられている思想が誰のものであれ、その人物が初期マルクスと同様に疎外の問題に関心の中心に据え、疎外をその歴史的起源から説明しようと試みていることだけは間違いないであろう。

このように解釈することの妥当性は、このパラグラフの欄外に、このパラグラフのすぐあとに挿入するように指示して、マルクス自身がつぎのように書き記している

ことから明らかにされうる。

「この『疎外』——哲学者たちにわかるようにこの言葉を用いつづければ——は、もちろん、ただ二つの実践的前提のもとにおいてのみ止揚されうる……」⁽¹⁷⁾

この文章は、周知のように、疎外論超克説の一論拠に使われてきた。だが、これはまことに奇妙な話だといわなければならないであろう。というのは、この文章の文字通りの意味は、そのような証拠にならないだけでなく、逆にその反対の説の正しさを証明しているからである。たしかにここでマルクスは「疎外」を留保つきで使用している。このことは、しかし、マルクスがこの用語の使用にためらいを感じていたことを推測させるだけである。彼が疎外概念そのものの使用にためらいを感じていたことも、ましてそれを放棄してしまったことなどもけっして示唆してはいないのである。むしろ先入見に捉われずに虚心に読めば、この文章は、マルクスがまえに引用した長文のパラグラフにおいて描き出されているような主客転倒の状態を——何らかの理由から誤解されさえしなければ——「疎外」という哲学的用語で表現してもさしつかえないと考えていたことを示している。そして、このように解釈することが妥当であるとすれば、この欄外注は、まえに引用したパラグラフにおいてその歴史的起源から疎外の問題が論じられていたことをマルクス自身が証言したものとみなされうるのである。

三

さて、以上でみてきたように、『経済学・哲学草稿』で提起した労働の疎外の起源の問題をマルクスは、その後も放棄することなく問いつづけ、『ドイツ・イデオロギー』において一定の解答を見出した。しかし、もちろん、この共著ではたんに『経済学・哲学草稿』以来のマルクスの懸案の一つが解決されただけではない。すでに前節でも指摘したように、そしてこれまでに引用したパラグラフからも知られるように、この共著で新たに重要な諸概念が導入され、唯物史観の輪郭が形成されたことによって、初期マルクスの疎外論が全体としていっそう発展させられたのである。

最初の節で述べたように、マルクスが自らの疎外論を発展させて行く過程でもっとも重要な役割を演じたテーゼの一つは、「人間の自己疎外の神聖なる形態」が「神聖ならざる諸形態における自己疎外」によって規定されているというテーゼであった。人間の現実的生活における自己疎外の規定的意義を強調するこのテーゼから、当然、狭義の哲学の枠をこえて、人間の現実的生活とその歴史とを科学的に研究しなければならないという方法

的指針が導き出される。実際にマルクスはこの結論にもとづいた作業を経済学研究を中心として精力的に押し進めた。そしてこの過程で問題のテーゼそのものをいっそう豊かなものにして行ったのである。『ドイツ・イデオロギー』で何よりもまず注目すべきことは、こうして発展させられたこのテーゼが新しい歴史観のもっとも基礎的な命題として主張され、そしてその方法的意義が自覚的に強調されていることであろう。この点についてはよく知られているが、『ドイツ・イデオロギー』第一章から有名な箇所を引用しておこう。

「天上から地上に下降するドイツ哲学とはまったく反対に、ここでは地上から天上へと昇る。……現実的に活動している人間から出発して、人間の現実的な生活過程から、この生活過程のイデオロギー的な反映や反響の発展もまた叙述されるのである。……意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定する。第一の見方では、生きた個人としての意識から出発するのにたいして、第二の、現実的生活に照応する見方では、現実的な生きた諸個人そのものから出発し、そして意識をたんに彼らの意識としてのみみる。」⁽¹⁸⁾

このような哲学的洞察を基礎にして、『ドイツ・イデオロギー』においてその輪郭がはじめて体系的に構築されたのが、マルクスとエンゲルスの最大の業績の一つであった唯物論的歴史観であった。この新しい歴史観は、抽象的な経験論的歴史観はもとよりヘーゲル主義的な觀念論的歴史観をも完全に克服したものであり、今日もなおその生命を保持しているだけではなく、その魅力はますます多くの人々を自らに引き寄せている。したがってまた、それは今日もなお全体としてもまたその諸部分についても活発な論争の対象にされているが、しかし、ここではそれらの興味深い諸論点に立ち入ることはできない。さしあたってここでは、初期マルクスの疎外論の最重要テーゼの一つがいかに発展させられたかを確認するにとどめ、つぎに、それを基礎にして唯物論的歴史観が形成されたことによって疎外論にどのような新しいものもたらされたかということだけを考察しておかなければならない。

まず最初に注目すべきことは、『ドイツ・イデオロギー』において諸個人のもっとも基本的な活動の構造を本質的に規定するものとして生産諸力および交通諸形態などが新たに見出されたことによって、従来のマルクスの疎外概念が一步つっこんで具体的に規定されるようになったということである。この点についてはすでに前節でも簡単に触れたし、前節で引用した長文のパラグラフはその十分な例証になっていたもので、ここではもう一つの

例だけを挙げておくだけで十分であろう。この共著の第一章のなかで、近代資本主義の発展が諸個人にたいしてどのような状態をもたらしたかということが、つぎのように描き出されている。

「それゆえ、ここに二つの事実が示されている。第一に、生産諸力が諸個人から完全に自立し、切り離されたもの、諸個人とならぶ一つの独自の世界としてあらわれる。このことは、諸個人——彼らの諸力が生産諸力である——が分裂し、相互に対立しあって生存していること、しがし、他方、これらの諸力はこれらの諸個人の交通と連関においてのみ現実的な諸力であるということにその根拠をもっている。それゆえ、一方の側には生産諸力の総体。それはいわば物的な形態をとっていて、諸個人自身にとって、もはや諸個人の諸力ではなく、私有財産の諸力であり、したがって諸個人が私的所有者であるかぎりでの諸個人の諸力であるにすぎない。……これらの生産諸力にたいして大多数の諸個人が対立しているが、これらの諸力がこれらの諸個人から引き離され、それゆえ彼らは、すべての現実的な生活内容を奪われ、抽象的な諸個人になってしまっている。」⁽¹⁹⁾

かつて『経済学・哲学草稿』では労働者からの労働生産物の、さらにそれを生産する労働活動そのものの疎外が問題にされた。ここでは、労働者の活動そのものを本質的に規定するものとして生産諸力と交通諸形態とが視野に導き入れられ、特定の交通諸形態のもとで、つまり諸個人が分裂し対立しあっているような条件のもとで、諸個人の生産諸力が彼らから疎外されることが問題にされている。前節で引用したパラグラフ同様、このパラグラフもまた、『ドイツ・イデオロギー』において諸個人の活動の構造が概念的に把握されたことによって、『経済学・哲学草稿』当時の疎外概念がいかに発展させられたかを疑問の余地なく示しているといってもよいであろう。

だが、この共著においてさらに注目すべきことは、諸個人と彼らの活動、つまり彼らの諸力ならびに諸関係の主客転倒の状態が、諸個人の生活にどのような結果をひき起こさざるをえないかについて非常に興味深い考察が展開されていることである。『経済学・哲学草稿』や『聖家族』ではマルクスは、諸個人からの「人間の本質」、「人間性」の疎外について語っていたが、同じ問題が『ドイツ・イデオロギー』ではつぎのように論じられている。

「……歴史的発展の経過において、そしてまさに分

業の内部における社会的諸関係の不可避免的な自立化によって、各個人の生活に一つの区別があらわれてくる。すなわちそれは、個人の人格的であるかぎりの生活と、労働のなんからの部門およびそれに属する諸条件に包摂されているかぎりでの生活との区別である。……階級的個人にたいする人格的個人の区別 [der Unterschied des persönlichen Individuum gegen das Klassenindividuum]、個人にとっての生活諸条件の偶然性は、それ自体ブルジョアジーの産物である階級の出現とともに はじめてあらわれてくる。」⁽²⁰⁾

『ドイツ・イデオロギー』のその他の箇所を援用するならば、このパラグラフで強調されている各個人の生活における区別について理解を得るのは、けっして困難ではない。要するに、「個人の人格的であるかぎりでの生活」とは、その生活が「自己活動」[Selbstbetätigung]、自由意志的な [freiwillig] 活動であるような生活のことであり、そして「人格的個人」とはそのような生活をおくっているかぎりでの個人のことである。それにたいして、「労働のなんからの部門およびそれに属する諸条件に包摂されているかぎりでの生活」とは、「自己活動」、自由意志的な活動という体裁をまったく失ってしまっているような生活のことであり、「階級的個人」とはそのような生活をおくっているかぎりでの個人のことである。このような区別がたんに記述的明説的な性質のものではなく、同時にまた価値的規範的な性質のものであることはおのずから明らかであろう。しばしば、マルクス主義の実証主義化に努めてきた研究者たちによって故意に無視されてきたが、『ドイツ・イデオロギー』においても、「自己活動」、「人格的生活」、「人格的個人」等々の価値的規範的でもある概念がその議論の不可欠の前提をなしていたのである。そしてこのような観点からみれば、このパラグラフにおいて、若きマルクスの疎外論のもっとも重要な思想の一つが発展させられていることが、容易に認められるであろう。『経済学・哲学草稿』においてマルクスは、労働者からの労働生産物の、さらに労働そのものの疎外が、結局のところ、労働者からの「人間の本質」の疎外を意味することを強調していた。そしてこの思想が『聖家族』においてもマルクスの批判の根底に据えられていたことは、すでに第一節でみてきた。この思想をさらに発展させて、『ドイツ・イデオロギー』の著者たちは、諸個人の基本的な諸力ならびに諸関係の自立化、それによる諸個人の内部における人格的個人と階級的個人あるいは偶然的個人との分裂、後者による前者すなわち人格的個人の圧倒、さらには圧倒という悲惨な状態のうちに時代の真の問題をみていたのである。

ところで、以上のように疎外概念が発展させられれば、当然、疎外の止揚の概念もまた発展させられずにはおかないであろう。実際に、この疎外の止揚の概念の発展において『ドイツ・イデオロギー』はきわめて重要な位置を占めていたのである。

すでに述べたように、疎外の止揚にかんするマルクスの基本構想は、『ドイツ・イデオロギー』執筆以前にすでに形成されていた。たしかに、この最初の構想の諸要素はその後のマルクスの諸著作のなかで生きつづけて行くのであるが、しかし、それにもかかわらず、この構想は全体としてまだいっそうの具体化を必要としていた。そしてこの必要が満たされ、この構想がいっそう発展させられたのが、まさに『ドイツ・イデオロギー』においてであった。

これまでにみてきたように、この共著で強調されていたのは、「分業」によって、諸個人の基本的な活動の構造を規定している彼らの生産諸力と交通諸形態とが彼らから自立化し、諸個人がそれらの諸条件を支配しコントロールするのではなく、逆にそれらの諸条件の方が諸個人を支配しているという状態であ、そして、その結果として人格的個人と階級的個人との分裂が生じ、後者によって前者が圧倒されるという状態である。このような疎外を止揚するということは、当然、なによりもまず、「分業」を廃止し、諸個人が自らの生活諸条件を支配しコントロールすること、そしてそれによって諸個人の生活の内部における分裂を克服することではなければならない。実際に『ドイツ・イデオロギー』においてこのことが、疎外の止揚の運動としての共産主義の課題としてくりかえし強調されている。それらのうちからここでもっとも重要なものを引用しておくことにしよう。

「分業による人格的な諸力（諸関係）の物的な諸力への転化は、それについての一般的な表象を頭のなかから追い出すことのみによってではなく、ただ諸個人がそれらの物的な諸力を再び自己のもとに包摂し、分業を止揚することによってのみ、再び止揚される。このことは、共同社会なしには可能ではない。共同社会においてはじめて人格的自由が可能になる。……現実的な共同社会においては、諸個人は彼らの連合において、また連合によって、同時に彼らの自由に到達する。」⁽²¹⁾

ここに『ドイツ・イデオロギー』における疎外の止揚の構想のほとんどすべての基本的な諸要素がすでに述べられているといってもよいであろう。このパラグラフから知られるように、「分業」にもとづいて生じた疎外を止揚するには、「分業」を止揚しなければならないが、

それが可能なのは、従来の疎外された生産諸関係および交通諸関係を廃止し、新たに諸個人の自由な連合にもとづく共同社会をつくり出し、それによって諸個人が自己の疎外された諸力を再び自らのコントロールの下に置くということによってである。この新しい共同社会において諸個人の諸力および諸関係の諸個人自身による支配——これを「自主管理」と呼んでもよいであろう——が実現され、社会の発展から自然発生性がはぎとられれば、このときはじめて諸個人の生活の内部の分裂が克服され、人類の最良の部分が長いあいだ夢みてきた諸個人の諸素質の全面的発達と人格的自由が可能になるであろう。これが、『ドイツ・イデオロギー』の著者たちの疎外の止揚の基本構想であり、彼らの希望であった。この構想が、『ユダヤ人問題によせて』におけるマルクスの人間解放の理想、『経済学・哲学草稿』の独自の共産主義の構想が、唯物史観の形成にともなっていっそう具体化され、明確化されたものであることは、説明を要しないであろう。そして同時に注意しておきたいことは、この構想が、マルクスの『資本論』その他の後期の諸著作において、またエンゲルスの晩年の諸著作においても、よりいっそう発展させられこそすれ、放棄されることなく保持されていたということである。

では、この希望は誰によって、いかなる前提のもとに実現されるのであろうか。

この最初の問いにたいしてマルクスはすでに『ヘーゲル法哲学批判序説』のなかで、「プロレタリアート」という解答を得ていた。そしてこの解答が、『経済学・哲学草稿』を経て『聖家族』においていかに発展させられたかについて、すでに最初の節で簡単に概観した。では、それは『ドイツ・イデオロギー』ではどうなったのであろうか。つぎのパラグラフはこの問いにたいして疑問の余地が存在しない仕方で答えている。

「……プロレタリアたの場合には、彼らの生活条件、すなわち労働が、またそれとともに今日の社会の生存諸条件全体が、彼らにとって偶然的なものになってしまっていて、それにたいして個々のプロレタリアはいかなるコントロールを持つことができず、またそれにたいして、彼らにいかなる社会組織もコントロールをあたえることができない。そして、個々のプロレタリアの人格と彼らに押しつけられている生活条件、すなわち労働との矛盾が、彼自身にとってはっきりとあらわれている……。プロレタリアたちは、人格的な力を発揮するためには、彼ら自身のこれまでの生存条件——それは同時にこれまでの社会全体の生存条件でもあるが——を、すなわち労働を廃止しなければならない……。」⁽²²⁾

これが『ヘーゲル法哲学批判序説』以来のマルクスの思想を発展させたものであることは一目瞭然であろう。そして、ここでもまた「人格的な力」という価値的規範的概念が重要な役割を演じていることについても、もはや指摘するまでもないであろう。よく知られているように、このような革命主体にかんする明らかに疎外論的な思想も『ドイツ・イデオロギー』以後もマルクスとエンゲルスによって、放棄されることなく、いっその発展させられて行ったのである。⁽²³⁾

しかし、疎外の止揚の諸条件について『ドイツ・イデオロギー』では、たんに以上のように『独仏年誌』以来の思想が発展させられただけではない。さらに新しい思想もつけ加えられたのである。つぎの諸パラグラフは、この共著において初期マルクスの疎外の止揚の諸条件にかんする構想がいかん保存されているか、そしてそのみならず、いかん発展させられているか——言葉の真の意味で、すなわち新しいものがつけ加えられているという意味で——を十分に例証している。

「それゆえ〔疎外の結果として〕、いまや諸個人は現存する生産諸力の総体を、たんに彼らの自己活動に到達するためだけではなく、そもそも彼らの生存を確保するためにすら、領有しなければならぬところまで立ちいたっている。この領有は、まず第一に領有されるべき対象によって——すなわち、一総体にまで発展させられた、そしてただ普遍的な交通の内部でのみ現存する生産諸力によって、条件づけられている。それゆえ、この領有は、すでにこのような側面からも、そういう生産諸力および交通に照応する普遍的な性格をもたなければならない。さらに、これらの諸力の領有は、それ自身、物質的生産諸用具に照応する諸能力の発展にほかならない。

……ついで、この領有は、領有する諸個人によって条件づけられている。あらゆる自己活動から完全に排除されている現在のプロレタリアたちだけが、彼らの完全な、もはや局限されない自己活動——それは、生産諸力の一総体の領有、そしてそれとともに定立される諸能力の一総体の発展に存する——を貫徹することができる。……

ついで、この領有は、それが遂行される仕方によって条件づけられている。それは、プロレタリアート自身の性格によって再び普遍的なものであらざるをえない結合と革命とによってのみ遂行されるのであるが、この革命において、一方ではこれまでの生産様式ならびに交通様式およびこれまでの社会的編制の力がくつがえされ、そして他方ではプロレタリアートの普

遍的な性格および領有の貫徹に必要なエネルギーが発展し、ついでプロレタリアートは、そのこれまでの社会的地位からそれにまだ残されていたあらゆるものを一掃する。」⁽²⁴⁾

ここで二番目に述べられている、「あらゆる自己活動から完全に排除されている現在のプロレタリアたち」だけが疎外された生産諸力の領有の主体になりうるという思想は、さきに指摘したように、『ヘーゲル法哲学批判序説』以来のマルクスの思想が発展させられたものである。そして同様のことは、三番目の部分に書かれている革命の普遍的な性格にかんするテーゼについてもいえることであろう。だが、最初の部分で強調されている生産諸力の普遍的発展にかんするテーゼは、『ドイツ・イデオロギー』ではじめて新しくつけ加えられたものである。マルクス自身が強調しているところによれば、疎外の止揚にとって生産力の発展は「絶対的に必要な前提」なのである。このテーゼが、革命全体にかんするテーゼとともに、マルクス主義のもっとも重要な構成要素の一つとして、この共著以後マルクスとエンゲルスによっていっそう発展させられて行ったことは、改めていうまでもないであろう。

さて、生産諸力が普遍的に発展し、「あらゆる自己活動から完全に排除されているプロレタリアたち」が大量に出現してくれば、そのときはじめて疎外の止揚が可能になる。ここで引用したパラグラフのあとにもこの可能性の現実性への転化について書かれているが、もはやそれを引用する必要はないであろう。なぜなら、すでに以上で『ドイツ・イデオロギー』において、たんに疎外の歴史的起源の問題に一定の解答があたえられただけでなく、疎外概念および疎外の止揚の概念がいっそう発展させられたことが、そしてさらに疎外の止揚の実践的諸前提にかんする研究が飛躍的に発展させられたことも十分に明らかにすることができたからである。

お わ り に

これまでの考察からつぎのような結論を導き出すことが許されるであろう。すなわち、疎外論超克説の信奉者たちが最近力説している「『ドイツ・イデオロギー』における疎外論の超克」という仮説は、この共著にたいする誤解にもとづく根本的に間違った見解にほかならない、と。たしかに、しばしば誤謬から何か優れたものが生まれ出てくることがあるように、彼らの努力もその副産物としてある種の積極的な成果さえももたらした——ここで私はいささか大げさに取り沙汰された『ドイツ・イデオロギー』の編集問題を念頭に置いている——。だが、それにもかかわらず、この副産物によって彼らは疎

外論超克説に説得力のある論拠を提供するのに成功してこなかった。そして、以上で考察してきたように、その副産物も利用して『ドイツ・イデオロギー』を注意深く検討してみるならば、疎外論超克説とはまったく反対の仮説こそが正しいことがわかるのである。つまり、実際にはこの共著において初期マルクスの疎外論がたんに保存されているだけではなく、まさに文字通り発展させられたのである。おそらく、この点を見失うことは、この共著で達成されたその他の諸業績（唯物史観の形成、フォイエルバッハ批判、シンティルナー批判等々）の真の意味の理解可能性を放棄するに等しいであろう。⁽²⁵⁾

最後に、周知の文献学上の理由からここではもっぱら『ドイツ・イデオロギー』第一巻第一章「フォイエルバッハ」のみから引用したが、この共著のその他の諸章にも、以上の結論と矛盾する文章は見出されないことをつけ加えておきたい。

注

- (1) 入手しやすい代表的な文献のみをつぎに挙げておこう。広松渉『マルクス主義の成立過程』、至誠堂、1968年。同『マルクス主義の地平』、勁草書房、1969年。同『唯物史観の原像』、三一書房、1970年。同『「ドイツ・イデオロギー」の文献学的諸問題』、『情況』1974年1月号所収。ゲ・ア・バガトゥーリヤ「K・マルクスとF・エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』第一章原稿の構造と内容」、『新版ドイツ・イデオロギー』、花崎訳、合同新書所収。同「マルクス主義の歴史における『ドイツ・イデオロギー』の位置」、『情況』、1973年1月号所収。またつぎの文献も参照せよ。山本啓「『ドイツ・イデオロギー』の共同体論」、『情況』1974年12月号所収。今村仁司「マルクスの歴史理論」同『情況』所収。さらに私の論文「マルクスの疎外概念とマルクス主義——広松渉氏の疎外論批判の批判——」、『現代の理論』、1973年4,7,8,9月号所収）にたいする広松氏のつぎの反論もまたここで挙げられるべきであろう。広松「『ド・イデ』と疎外論の超克」、『情況』、1974年7,8,9,11月号および1975年1・2月号所収。この反論にたいする私の再批判も念のために挙げておきたい。「疎外論超克説批判」、『現代の理論』、1975年5月号所収。
- (2) 初期マルクスの疎外論の発展にかんするきわめて優れた叙述がつぎの文献にみられる（ただし『独仏年誌』の時期まで）。山中隆次『初期マルクスの思想形成』、新評論、1972年。さらにつぎの諸文献を参照せよ。城塚登『若きマルクスの思想』、勁草書房、1970年。同『新人間主義の哲学』、NHKブックス、1972年。メサーロシュ『マルクスの疎外理論』、三階徹、湯川新訳、啓隆閣、1972年。その他D・マクレランの邦訳書や、かれのつぎの文献も参考になる。David McLellan: The Thought of Karl Marx. New York 1971. McLellan: Karl Marx. His Life & Thought. New York 1973.

- (3) たとえば前掲『初期マルクスの思想形成』、p. 207。参照。フォイエルバッハと若きマルクスとの関係を詳細に論じたシュフェンハウアーも同様の結論を導き出している。Werner Schuffenhauer: Feuerbach und der junge Marx. 2., bearbeitete Auflage. Berlin 1972 [その第一版が桑山政道氏によって翻訳されている。『フォイエルバッハと若きマルクス』、福村出版]
- (4) K. Marx: Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung. In: K. Marx und F. Engels Werke. Bd. 1, S. 379.
- (5) K. Marx: Ökonomisch-philosophische Manuskripte. Reclam. S. 184.
- (6) K. Marx und F. Engels: Die heilige Familie. In: ME Werke. Bd. 2, S. 55-56.
- (7) ibid., S. 37.
- (8) ここで引用した『聖家族』のパラグラフの思想についてはすでにつぎの文献で著者がその問題点をくりかえし指摘している。Jürgen Habermas: Theorie und Praxis—Sozialphilosophische Studien, Neuwied 1963 [邦訳『理論と実践』、細谷真雄訳、未来社]
- (9) 広松渉『マルクス主義の地平』、勁草書房、p. 245.
- (10) K. Marx: Ökonomisch-philosophische Manuskripte. Reclam. S. 164-165.
- (11) 前掲『マルクス主義の地平』、p. 243-244.
- (12) Die heilige Familie. In: ME Werke. Bd. 2, S. 124.
- (13) Marx-Engels-Gesamtausgabe. Proband Diets Verlag. Berlin 1973 [以下、新 MEGA テスト版]、S. 118。
広松渉編『手稿復元新編輯版ドイツ・イデオロギー』、河出書房、1974年、[以下、広松版]、S. 164.
- (14) 同上
- (15) 新 MEGA テスト版、S. 57-59。広松版、S. 34-36.
- (16) その一つとしてここで挙げておきたいのは望月清司氏の問題提起である。『マルクス歴史理論の研究』参照、岩波書店、1973年。そこで望月氏は、エンゲルスの筆跡で書かれているこのパラグラフに表明されている思想が、一体誰のものであるかについて著しく強引な解釈をおこなっている。この解釈にたいする批判としてつぎの諸論評が挙げられる。花崎泉平「望月清司著『マルクス歴史理論の研究』論評」、『思想』1974年3月号所収。石井伸男「望月清司『マルクス歴史理論の研究』にかんする批判的覚書」、東京唯研編『唯物論』第46号所収。また拙稿「森田氏の批判に答える」参照、『現代の理論』、1974年6月号所収。
- (17) 新 MEGA テスト版、S. 59。広松版、S. 37.
- (18) 新 MEGA テスト版、S. 44-45。広松版、S. 31.
- (19) 新 MEGA テスト版、S. 110。広松版、S. 138.
- (20) 新 MEGA テスト版、S. 99。広松版、S. 120.
- (21) 新 MEGA テスト版、S. 98-99。広松版、S. 120.
- (22) 新 MEGA テスト版、S. 100-101。広松版、S. 122-124.
- (23) たとえばマルクスの『直接的生産過程の諸結果』

のつぎのページを参照せよ。Karl Marx : Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses. Archif sozialistischer Literatur 17. Verlag Neue Kritik Frankfurt. S. 18.。国民文庫，岡崎次郎訳，32-33 ページ。

- (24) 新 MEGA テスト版，S. 111-112.，広松版，S. 140-142.

- (25) 今日では，疎外論超克説とは逆の，後期マルクスによって疎外論が保持され発展させられたという仮説が多く研究者によって支持されている。最近のもっとも優れた業績の一つを挙げておきたい。水谷謙治著『労働疎外とマルクス経済学』，青木書店，1974年。